

色々観察してきたこと

動物応用科学科4年 鈴木大志

研究活動を通して観察し、感じたことを少し書いていきたい。

まず、自分の研究について。何かを明らかにするというのは本当に難しい。色々な可能性を考え、それを絞り込まないといけない。自分の研究でも後から後から可能性が出てくるので、全く絞り切れなかったというのが少し残念に思える。とはいえ、予想以上の結果が出たというのも事実で、得られたデータからきれいな結果が出るのは何とも気持ちの良いものだった。また、フクロウの研究というのはどうにも受けが良いようだ。友達に話しても面接で話しても興味を持って聞いてもらえるし、質問もされる。ただ同時に思うのは、「興味がある」＝「知りたい」とはならないということだ。フクロウが好きだという人は多いが、何を食べるのかも知らない人もいる。興味がない人に興味を持ってもらう、興味がある人には正しい知識を持ってもらうというのが野生動物学の重要な役割の1つではないかと思う。

次にフィールドワークについて。他の人に比べれば回数は少なかったが何度かフィールドワークを行った。基本的に森を歩くのだが、森は情報に溢れている。植物や動物、鳴き声、食痕、糞、地形など挙げれば切りがないほどだが、情報を利用するには知識がなければならない。同じ植物を見ても自分と先生では違うものが見えるのだろうし、鳥の鳴き声を聞いても自分とDJでは聞こえるものが違うのだと思う。昆虫にしてもそうだし、鹿にしてもそうだろう。そこがフィールドワークの面

白いところで、野生動物研究の難しいところだなと思った。

次に調査を協力してもらった学外の方たちについて。どの方も動物が好きで、自然の中にいることが好きな人ばかりだった。当たり前かもしれないが、野生動物に携わり、それで飯を食っているような人は野生動物が大好きでなければならないのかも知れない。野生動物の調査、研究には必ずと言っていいほど地道な作業が付随する。その動物が大好きであるほど、その作業も苦痛ではなくなるのではないだろうか。例えば八ヶ岳自然クラブの方々はいくつものフクロウの巣箱を作り、設置し、定期的に観察し、レポートを作る。自分は大変だろうなと思ったが、その方々は楽しんでその作業をこなしているらしい。多分何に関してもそうだと思うが、何かを突き詰めるのには好きであること、そして好きでいつづけることが必要不可欠だということを実感した。

最後に研究室の人々について。自分たちの代と後輩たちの代、ほとんど年も離れず学校も学科も研究室も同じなのにこうも違うものかと正直驚いた。面白いくらい違ったと思う。先輩は2人しかいないから代としての雰囲気はわからないけれど、どちらがスタンダードなのかちょっと気になるころではあった。おそらく先生は後者の賑やかな雰囲気が好きそうなので、ある程度賑やかな研究室になっていくんじゃないかなと思う。自分は性質的にこの代で良かったと思いつつ、これで締めにしたいと思う。

